

理性と情動

——スピノザ哲学における合理主義の側面

浅野俊哉

「理性は自然に反することを何も要求しない。したがって理性は、各人が自分自身を愛すること、真に有益な自分の利益を求めようとする、そして人間をより大きな完全性へ真に導くあらゆるものを欲求すること、——端的に言えば、各人が自分の有をできる限り維持するように努めることを要求する。」(E4P8SC)

このスピノザの言明に代表されるような理性の役割は、通常「合理主義」の哲学と分類されるスピノザの哲学に、ある逸脱的な性格を与えているように思われる。本稿では、スピノザの理性に関する独自の把握の仕方を検討するとともに、規範的「合理性」一般に関する議論に、一つの視点を提供することを目的としたい。

一 十全な認識と共通概念

現代におけるスピノザ研究の権威マルシャル・ゲルーは、スピノザの合理主義を「絶対的合理主義」(Le rationalisme absolu)と呼び、それがいかなる神秘的なものをも排した上で人間が神と個物の完全な認識に至れるとした点で、他の古典的合理主義から区別されると

した。⁽¹⁾彼によればスピノザの合理主義は、絶対無限な実体という概念に代表される十全な概念から出発し、発生的な幾何学的演繹によって一切の個物と神の本質を理解しようとする最も徹底した合理主義の体系である。そこではライブニッツやデカルトにすら見られた神秘的なもの、迷信的なものが入る余地は一切存在しない。純粹な認識において人間の知性は神の知性と同一になる。神の一切は認識可能であり、不可能性は存在しない。スピノザの体系の中で初めて神秘主義なしの絶対知が実現されるのである。⁽²⁾

このようにスピノザの合理主義が問題にされる時には普通、ゲルーの見解に代表されるような形而上学的な問題、特に觀念の十全性と幾何学的方法をめぐる側面が対象にされることが多い。しかしながら冒頭にあげた定理などに見られる理性の要請は、このゲルーの要約に過不足なく収まる内容を持っているのだろうか。スピノザの合理主義には、むしろ極めて経験的でプラグマティックな側面がはつきりと主張されてはいないだろうか。この点を考察するためにまず、その認識論的側面である觀念の十全性に関するスピノザの立

場がどのようなものであったかを簡単に確認しておきたい。

スピノザは観念の真理性をどこに求めたのだろうか。周知のように、それは観念 (idea) と対象 (ideatum) との一致にあるのではない。それは真の観念の外的特徴に過ぎないからである。「十全な観念とは、対象との関係を離れてそれ自身において考察される限り、真の観念のあらゆる特質、あるいは内的特徴を持つ観念のことであると解する。——私が内的特徴と言うのは、外的特徴すなわち観念とその対象との一致を除くためである。」(2D4, Ex) つまり真の観念の内的特徴は十全性である。ここで、彼の言う観念がいわゆる表象ではなく精神の能動を表現する概念であったこと、そしてそれは対象の形相的有 (esse formale) を肯定ないし否定する判断であったことを思いだしておきたい。⁶⁴スピノザにおいて観念は、知性が産出するものであつて無力な画像ではない。観念は外的対象に依存しないそれ自身の実在性を持っており、スピノザが「霊的自動機械」⁶⁵と呼んだ精神に固有の法則に従つて精神の中に形成されるものなのである。

したがって、観念は対象と一致するから十全なのではなく、十全であるから対象と一致することになる。この主張は一見スピノザの観念論的偏向を意味しているかにも見える。あるいは観念の表現内容と、それに固有の論理形式とが混同されているかのようにもとらえられる。しかし事実は全くそうではない。なぜなら実体における諸属性は互いに対立せず、同一実体の表現であるからである。すなわちスピノザにとって十全な観念は、その内容そのものの実在的な運動を表現する論理形式を備えており、内容とそれに固有の論理との

内的な統一として真理の認識が考えられていたのである。

ではこの観念は、スピノザの言う理性的な認識の場合にはどのように適用されるのだろうか。よく知られているように、スピノザは人間の認識段階を三つに分け、第一種の認識を想像知 (imaginatio) による認識、第二種の認識を理性 (ratio) による認識、第三種の認識を直観知 (scientia intuitiva) の認識とした。⁶⁶『エチカ』第2部定理40備考2によれば、第一種の認識が感覚や記号による漠然とした経験からの認識であるのに対し、第二種の認識は「われわれが共通概念すなわち事物の特質についての十全な観念を有することから」⁶⁷生じるものとされている。ここでは理性性が、共通概念 (notiones communes) および事物の特質の十全な観念と等置されていることに留意しておきたい。

ここで現れた第二種の認識である共通概念について知るための前提となる考え方は、「すべてのものに共通であり、部分の中にも全体の中にも等しくあるものは、十全にしか考えられない」(2P28) という言明の中にはっきりと現れている。より正確に言えば、この定理を含めこれに前後する次のような諸命題、すなわち「すべてのものに共通で、部分にも全体にも同じようにあるものは、決して個物の本質を構成しない」(2P27)、「人間の身体に、また人間の身体を刺激するのが常であるいくつかの外部の物体に共通かつ特有であるもの、そしてこれらの物体の部分にも全体にも等しくあるもの、そのようなものの観念もまた精神の中で十全であるだろう」(2P39)、「精神の中の十全な観念から精神の中に生じる観念はどのようなものであれ、同じように十全である」(2P40)、これら4

つの定理が共通概念を基礎づける条件になっているのである。

ここで「すべてのものに共通で、部分にも全体にも同じようにあるもの」が何を指しているかが、第二種の認識の内容を確定する際の大事な問題になってくる。スピノザは『エチカ』の第2部補助定理2およびその証明で「すべての物体はいくつかの点で一致する。なぜならすべての物体は一つの同一の属性の概念を含んでいるという点で一致しているからであり、さらにそれらは、ある時は緩やかに、ある時には速く運動させられることができるという点で、一般的にいえば、ある時は運動しある時は静止するという点で一致しているからである」と述べて、この共通なものが、自然界においては、延長の属性であり、運動と静止という直接無限様態であることを示唆している。そしてそれらは精神の中で十全な観念としてしかとらえられず、實在性を持った対象として理性的推論の基礎になると主張しているのである。

しかしながら、この共通概念の対象とする内容をこの程度の理解でとどめてしまうと、スピノザの合理主義のある側面を見落とすことになる。なるほどスピノザは「人間の行動と衝動を線・面・立体を探究する場合と同じように探究する」と語っていた。しかしながらスピノザの体系の中で理性の立場に立つということは、単に客観的な科学者の立場にたつて、一般的な自然の法則性を探究する態度をとるということと同義なのだろうか。以下の章では、スピノザの理性的認識はそのような立場には還元できないということを明らかにしていきたい。

二 理性の力動性

そもそもスピノザの「理性」という言葉は、『エチカ』の中だけをとってみてもいくつかの別の意味で用いられているように見える。たとえば、それが第二種の認識と等しいことを述べた第2部定理40備考2の内容と直接つながるものとしては、「事物を偶然としてではなく必然として観ることは理性の本性に属する」(2P4)および「ものがある永遠の相のもとに知覚することは理性の本性に属する」(2P4Q2)などの命題がある。それは理性の冷静で客観的な真理認識としての側面である。しかしながら冒頭に掲げたように一方で理性は、「各人が自分自身を愛すること、真に有益な自分の利益を求めようとすること、そして人間をより大きな完全性へ真に導くあらゆるものを欲求すること、——端的に言えば、各人が自分の有をできる限り維持するように努めることを要求する」(4P18Q)ものとしてもとらえられているのであって、ここでは理性は自己保存の努力であるコナトウスないし欲望(cupiditas)と考えられているのである。あるいは別の箇所では、「善である限りにおいて喜びは理性と一致する。——なぜならそれは人間の活動能力が増大されたり促進されたりすることから成り立っているからである」(4P58Dem)というように、今度は喜びの情動と理性とが同一視され、また別の箇所では「人間は理性の導きに従って生活する限り、ただそのかぎりでは、本性上常に必然的に一致する」(4P59)というように、理性が共同生活の原理、倫理的指針として把握されている。このため、スピノザの言う理性が、第一種の共通概念による認識

すなわち自然的物体における運動の静止の客観的認識であることを強調されたわれわれは、『エチカ』の他の箇所における理性の力動的な側面、すなわち欲望や情動 (affectus) と密接に絡み合ったその経験的ともいえる性格に触れるにつれ、それらの間の齟齬をどう処理するかという問題に直面せざるをえなくなるのである。たとえば、冒頭にあげたようなゲルールの合理主義解釈は、それ自体の妥当性を十分持っているとはいえず、『エチカ』第3部以降の分析が欠けているため、いまだ観念的な理性の把握にとどまっていると言わざるをえない。というのも、スピノザが理性の力動的な性格を描写し、共通概念の具体的・実践的側面が示され始めるのは、『エチカ』の第4部以降からだからである。

ここでわれわれは、スピノザが『エチカ』の中で論じている理性の記述について、いくつかの基準で分類、クラス分けを試みたい。それが、理性という名のもとで様々に語られている内容や性格をより正確に把握することにつながると考えられるからである。

まず、Aとして分類されるのは、理性が共通概念として、すなわち事物を必然として、ある永遠の相のもとで認識することを強調した箇所である。これには先に挙げた『エチカ』のD24D5を基本にして、「事物を偶然としてではなく必然として理解することは理性の本性に属する」というD24Eおよび、「ものがある永遠の相のもとで知覚することは理性の本性に属する」というD24Fの主張が代表的なものである。¹⁰⁾

次にAとして分類されるのは、理性による認識が自己保存の欲求であるコナトゥスの理解に結びつき、本性の必然性に従うことを意

味している箇所である。ここには、既出の4P26Scを代表として、「完全に有徳的に活動するとは、われわれにおいては理性の導きに従って活動し、生き、自己の有を保持する（これら三つは同じことを意味する）こと、そしてそれを自己本来の利益を求めるといふ原理に基づいてすることにほかならない」(D24)、「理性に従って活動するとは、それ自身だけで考えられたわれわれの本性の必然性から生ずることをすることにほかならない」(4P29Dem)などの主張が含まれる。またこの分類には、コナトゥスの認識自体に関わる4P26、4P26Dem、4P36Dem、4P66Scも含める。

さてここで、分類を先に進める前に、すでにこの段階で、理性的認識の内実が少なくとも二つの側面に特徴づけられたことを確認しておきたい。クラスAにおいては、理性的認識の対象は運動と静止の割合の認識であり、それはあらゆる個物に共通に存在するものとされている。そしてそれが、十全な認識であり永遠の相による認識であるとされ、時間性を越えた真理としての権利が主張されているのである。しかしこの段階でとどまるならば、スピノザの言う理性のダイナミズムはなかなか見えてこない。

理性の力動性を認識する第一歩となるのが、次のクラスAの認識といえる。この段階では、事物の間にある運動と静止の割合というもの、(「具体的に」)何であるかを認識することが要求されている。それは、個物の個性性を規定する一定の構成関係、個物を構成する諸部分の比率・割合 (ratio) の認識なのである。スピノザが最も純物体 (corpora simplicissima) という形相も質料もない要素の複合として個体の生成を説明した時に、彼は「もし個物を構成する諸部

分が、すべてが相互に運動と静止の割合を以前と同じに維持するような関係で、より大きくあるいはより小さくなるなら、個体はそれ自身の本性をいかなる形相の変化もなしに以前と同様保持するだろう」と述べることによつて、個物の本性をまさに要素間の一定の「関係 (proportio)」として考えていた。¹² つまり様態としてのすべての個体は、運動と静止の一定の構成関係を持った集合としてとらえられ、それらは速さと遅さ、運動と静止の割合、つまり関係の差異によつて互いに区別されたのである。ここで言う構成関係とはその意味で、個物の個性性を規定する「構造」そのものであると言つても間違ひではないはずである。ただここで注意しなければならぬのは、この構成関係自体が個物の本質を表現したものであり、その限りではそれは、自分の構成関係を維持しようとするコナトウスと外部からの触発に対する一定の変様能力とに対応しているという点である。

したがつて、一切が速度によつてしか区別されない世界がスピノザの言う様態の世界の際立った特徴だとしても、そこは単に還元不能な諸要素や力が無秩序に交錯する場ではない。スピノザによればこの世界は、個物の本質をなす一定の構成関係が、互いに自らの構成関係を維持するような外の力を獲得しようとしてせめぎ合う合成と解体のプロセス、言い換えれば外延的諸部分の帰属をめぐる絶えざる闘争関係の場としてとらえられているのである。無論そのような闘争関係の中で、ある一定の構成関係は他の構成関係と対立するのではなく、互いに還元不能の本質を表現しつつ一つの暫定的な全体を形作る。全く同じ構成関係を持った二つの体 (corpus) は決し

て存在しない以上、それらは互いに還元できない固有の力を保持しつつ、ある局面においては別の体と合致し、合成しあい (compositum)、互いが互いの成分となるのである。¹³

クラスAおよびAの認識が「共通概念」とよばれるのは、少なくとも二つの構成関係が、組み合つて、合一をする関係の領域をとらえているからである。しかもクラスAで理性的認識の一般的基礎を主張した場合を除いて、スピノザは共通概念を語る際二つの構成関係のうち的一方を、必ず自らの身体を意味するものとして指している。すなわち共通概念はここで具体性を獲得し、特定の個人の構成関係が自らの構成関係を補強し拡張する側面にのみ関わるようになるのである。¹⁴ この第二種の認識は、特定の構成関係に表現された個物の本質自体を対象にしているため、第三種の認識とは異なり、十全な認識ではあつても決して個物の本質を構成はしない。¹⁵ しかしながら、これは必ず一定の構成関係の合成しあう局面に関係しているため、必然的にコナトウスを充当する。というのも、特定の構成関係自体が解体されなまま新たな関係に入る時には、もとの構成関係に新たな外延的部分が帰属することになり、コナトウスの増大を帰結せざるをえないからである。¹⁶

これらのことから明らかなように、スピノザの理性が、Aにおいて身体的な活動力の増大と結び付いていることに矛盾はない。もともとスピノザによれば「人間の精神を構成する観念の対象は身体以外の何ものでもない」(2P13)のであつて、たとえ理性的認識にしても、それは抽象的なものではなく身体の変様の認識にほかならない。認識がわれわれの活動力のすべてを規定しているのである。た

だここで誤つてならないのは、理性に経験的・身体的プロセスが帰属するという事態は、精神が身体を支配するということではないという点である。理性は身体の活動力を増大するような変様を理解し、確知することとしかしていない。理性によって確実に把握された身体の変様のプロセスは、いわば「それ自体の法則性によって」さらにいっそう活動力を高めていく。身体は活動力を増す変様を肯定し、より豊富にしていくよう促すのが理性の役目であって、決して身体を一定の目的のもとに統制するのではないというこの点に、スピノザ哲学における内在性の特異な性格があるのである。スピノザにおいて一切の目的論は、想像知に属するものとして退けられている。身体は活動力を増大させる変様というのが喜びの情動にはかならない以上、理性の役割とは外的な目的ではなく、喜びの情動に奉仕し、それを増殖させるものとしか規定できないのである。

この点が、次の段階である理性の性格のBに関連する。クラスBとしての理性は、理性からの派生的情動と欲望によって規定される。まず理性からの派生的情動を規定したものは5P7、5P7Dmおよび4S9Dmがあり、一方理性から生ずる欲望を論じたものには、4P61、4P61Dem、4P63C、4App4、の記述がある。そしておそらくそれらの基礎になつてゐるものは3P59の「働きをなす限りの精神に関係する情動には、喜びあるいは欲望に関係づけられる情動以外のいかなる情動もない」という命題であろう。このように、スピノザの言う理性的認識には必ずその随伴物としての、能動的な情動が伴う。しかし能動的な情動はまた、今度は理性的な欲望を生み出すのである。「理性から生ずる欲望は受動でない喜びの情動だけ

から生じ得る。すなわち過度になり得ない喜びから生じ得るのであり、悲しみからは生じることができない。したがつてこの欲望は善の認識から生じ、悪の認識からは生じない」(4P63Dm)。情動から理性へのこの移行は、理性と情動との事実上分かちがたい一体性を示している点で、スピノザの理性論に特異な性格を与えている。

スピノザが言うように「理性から生じる欲望、すなわちわれわれが働きをなす限りにおいてわれわれの中に生じる欲望は、人間の本質が単に人間の本質だけから十全に理解される事をなすように決定されていると解される限り、人間の本性または本性そのものである」(4P61Dem)以上、今度はここで人間の理性はわれわれの能動的欲望と等置される。スピノザの世界観においては、人間も含めあらゆる個物はその本質としてのコナトウスの重層し複合する過程であつてみれば、そのコナトウスが欲望と等置されている人間においては、理性の営みもその根源的なコナトウスの結果でしかない。つまりそれは、自らの本質を実現しようとする能動的な欲望のプロセスの一つに過ぎないのである。理性や能動的な情動や欲望を、根源的なコナトウスで一元的に説明しようとするスピノザ独自の傾向がこれらの記述に現れている。

最後に、クラスCとして分類される理性は、人間の共同性に関わる記述である。ここに至つて理性は、個人倫理の範囲を超え、個体の活動力の増大という要請を満たすための必然的な帰結である人間相互の力能の合成という段階に到達する。「人間は理性の導きに従つて生活する限り、ただそのかぎりにおいてのみ、本性上常に必然的に一致する」(4P35)という定理がその基本であつて、それに基づ

4P35Dem, 4P35C1, 4P35C2, 4P37Dem, 4P37Sci, 4P40Dem, 4P72Sc, 4P73, 4P73Dem, 4A9p9C記述がこのクラスに属する。このクラスの理性は、直接的にはAの理性から導き出されるといってもよい。というのも、スピノザは理性の導きにしたがって生活する人間ほど有益ないかなる個物も自然の中に存在しないと主張の理由として、「人間にとつては自己の本性と最も多く一致するもの、すなわち人間が最も有益である。ところが人間は理性の導きに従って生活する時に真に自己の法則に従って行動し、またそのかぎりにおいてのみ他の人間の本性と必然的に常に一致するからである」(E3p9C1)と述べ、まさにAで示した構成関係の合致こそが、人間が互いに結び付いていく際の原則になるということを示明かにしているからである。すなわちここにおいて、共通概念とは構成関係の相似性、共通性についての理解であることが明確となる。人間にとつて自らの構成関係を維持し豊かにする物質的対象は自然界に様々な形で存在し得るであろうが、最も構成関係が一致し、相似性が高いのは人間存在であることがこの段階で明らかになるのである。

ここで大切なことは、構成関係が合致する局面とは、自分のみならず合致しあう相手の側も、自らの本質に対する理解をしている場合であるということである。スピノザにとつて受動感情に隷属している人間同士は本性上互いに一致するとは言えないのであり、あくまでも相手の側も理性の導きに従っていること、すなわち自らの最も本質的な欲望に従って活動力を増大させようとしている人間であることが要請されるのである。スピノザにはこのように、人間の能动性を個人というカテゴリーの内側でだけ考える発想はない。たと

えばニーチェにおける「超人」が最も能動的な人間の典型であるにしても、それがあつた種の個人主義の徹底から獲得されるものだとしたら、スピノザとはその能動性獲得のメカニズムは異なっている。スピノザの場合人間の能動性は、自然や社会体の中に充満する原理的に可能なあらゆる諸力を用いながら、それらを合成しあい、構成しあうプロセスの中で徐々に無限にまで上昇していくのであつて、その過程ですでに「人間」や「個人」という概念は越えられているのである。それらの概念は、集合体、編成体、アレンジメントといったプロセスを記述しうる用語に置き換えられなければならない。スピノザの発想の基本になつているのは、コナトウスの複合・編成というこの考え方であり、ここでは、人間が相互の構成関係を決して解体しない形でより大きな構成関係、より大きな集合、一つの内在的な全体性を組み立てていく論理が模索されている。そこに理性が介入するとしても、それはつとめてコナトウスすなわち欲望としてとらえられた非超越論的な理性なのである。

三 理性の実践的役割

ここまででわかるように、スピノザの合理主義は決して観念論に解消されないある積極的な側面を持つている。つまりスピノザにとつての合理性の規範を論じる際、認識論上の「十全な観念」を対象にするだけでは十分ではないのである。われわれはこの十全な観念に経験上対応するものをも問題にしていかなければならない。情動や欲望との関わりの中で理性を位置付けていくことが何よりも要請されるのはそのためである。

そこでこの章では、理性としての共通概念の実践的な役割を再確認しておきたい。共通概念による認識の第一段階とは、まず一切の事物をプロセスとしてとらえることであると云える。スピノザは最単純物体という、形態も機能も持たない要素の集合として個物をとらえた。それは個物の個性性を外の力との関係でとらえること、すなわち互いに運動と静止、速さと遅さによってしか区別されない諸力の複合体として様態上の個物を認識することであった。この認識はわれわれが表象で埋め尽くしているこの日常的な世界を、いったん力の葛藤の場としてとらえ、あらゆる表象の背後にある力学を取り出してみようとする営みである。つまり文字通りの意味で、第一種の認識である想像知が、第二種の認識である共通概念（「あらゆるものに共通であり、部分の中にも全体の中にも等しくあるもの」の認識）によって越えられるのである。⁽²³⁾この様態的世界で起こることの一切は、この諸力の効果・結果であり、われわれは原則としてあらゆる力に遭遇しうる存在としてとらえられる。したがって「人間」や「個人」、「主体」といった概念が、微細な諸力の効果としてではなく、外部の諸力との関係を捨象した「個の孤立した系として見なされる時には、それらは十全な概念ではなく、「一般概念」「抽象概念」としてスピノザから手ひどく批判されることになるのである。⁽²⁴⁾

しかし一切を力の関係でとらえるということは、さらに進んで、個物の個性性、その独自の構成関係を把握することにつながる。というのも、あらゆる個物は力の無秩序な反映ではなく、それぞれが自分の構成関係のもとに外の諸力を取り入れようとしている動的な

システムだからである。これは、自らの構成関係を維持し高めるものと結び付いていこうとするコナトゥスの側面、すなわち個体の活動力の側面から、一つの個性性を規定している力学を把握することにほかならない。とはいえ第二種の認識は第三種の認識と違って、あくまでこの力学を、関係性の中でとらえるだけであったことを思いだしたい。⁽²⁵⁾しかもスピノザは、受動感情もわれわれがそれについて明瞭判然な観念を形成する限り受動でなくなり、「われわれが何らかの明瞭判然とした概念を形成し得ないようにならない身体的変様も存在しない」ことを共通概念を引きあいに出しながら述べている。⁽²⁶⁾したがって、この第二種の認識においてわれわれは、個体の活動力がどの地点で伸長しどの地点で力を妨げられているかについての明晰な概念を形作ることが要請されているのである。これが共通概念の第二の実践的な役割である。十全な観念とはこの場合、身体活動力を規定する能動・受動の力のありようを確実に把握することとなる。そしてその結果として、われわれの活動力を増すものが何か、あるいは活動力を阻害するものは何かはつきりと確認される。スピノザは「善とはそれが有益であることをわれわれが確知するもの」(E1C)であると語っていた。有益であるとは、われわれの活動力の増大をもたらすものであり、われわれ自身の構成関係と合致するものだが、それが何かを確認し、確実に所有する作業を行なっていくのが理性の役割なのである。

しかしながらより具体的に言えば、われわれは自らの活動力の増大を、経験的には喜びの情動によってしか知ることはできない。ドゥルーズも指摘するように、われわれは自らの構成関係と何が合致す

るかについてあらかじめアプリオリな認識を持つていないのである。²⁷もしわれわれが、自然の全秩序をその十全な原因と連結のもとに認識することができるとしたら、われわれの知性が神の知性と等しいことになってしまう。われわれは自らの構成関係がどのような力の連結のもとで最も能動的に維持されるかについてあらかじめ確定的な知識を持つていない。自然の広大な秩序の中で、どの構成関係が他の構成関係と合致するのかわからないのは自明な所与ではないのである。たとえば、われわれは自然界のどの生き物が食物になるかという知識を、アプリオリに知っているのではなく、われわれの構成関係と合致する（養分になる）場合と、われわれの構成関係を破壊する（中毒させる、死に至らしめる）場合との苦い経験から、長い実験の積み重ねの末に獲得してきた。スピノザによれば、その種の実験はまだ終わっていないし、常に続けられるべきものなのである。というのもわれわれは人間の生に関わるあらゆる領域で、何が自分たちにとって有益かを決して十全に知るに至っていないからである。一つの身体がどれほど驚くべき能力を持っているかについてわれわれが無知であるばかりではない。われわれが一人になった時、その二つの身体がどれほどの力を合成しあえるか、複数の身体からなる一つの集団がどのような力をもちうるか、われわれの創造する力、思惟する力、生きていく力を増していくためにはどのような権力の配置、力の組み合わせが必要かについて、われわれはアプリオリには何も知らないのである。したがって共通概念の最後の役割は、われわれが各々の活動力を、互いに相殺し合うことなく高めていくという社会的実践・実験を組み立てていくことにある。スピ

ノザの政治哲学の決定的な意義は、諸力が対立しあうのではなく、合成しあうこの局面を見出し、そのプロセスを社会契約に代えた点にあるのであり、ここに共通概念としての理性は、ミクロな個人心理の分析から集団力学の編成までを包括する普遍的な力を持つに至るのである。

結語

このようにスピノザの合理主義は、単なる認識論レヴェルでの觀念の十全性だけをめぐるものではない。共通概念による認識を通して、自らの身体を構成する諸力の構造を見きわめていくことがその実践的機能の第一の役割であった。そして、自らの本質をなす構成関係を維持し豊かにし得る外部の諸体を、善なるものとして確知し、各自がそれらを自分の構成関係にとりこんでいく経験的・実験的なプラクシスが第二に求められるのである。

その際合理性の規範になっているのは、自らの活動力を増し喜びの情動を増やすものが善であるという認識であった。しかしそれではスピノザの倫理学は、主観的な快の感覚を善とした快樂主義の自然主義的倫理学のバリエーションではないかという意見も出てこよう。快と喜びとの違いも含めそうした異論に対して詳細に反論するのは、別の機会に譲る。ただここで改めて注意を促しておきたいのは、スピノザの言う理性の認識があくまでも〈共通〉概念の認識であって、その際必ず他者との共通の平面の上で、互いの活動力を増すもの、有益なものが確知されたのだという点である。スピノザの合理主義における最低限の規範とは、各人の構成関係を破壊しないこと

である。したがって個々の人間の本質の開花を妨げる権利は何人にも存在しない。しかしこれまでの議論から当然理解されるように、コナトウスはエゴイズムでは決して充足されないのである。

だからおそらく、スピノザ主義を具体的な社会生活での格率とするためには、少なくとも次の二つの実践が常に車の両輪のように要請されるのであろう。一つはクリティックの実践。つまり諸部分の全体的な活動力の増大である喜びが、エゴイズムという局部的な欲求の充足に転化してしまう事態に対する絶えざる批判の作業である。これは個人レヴェルにも集団レヴェルにも当てはまる。そして、もう一つはクリエーションの実践。これは、あらゆる人々があらゆる場で、特定の力に回収されない個性的な喜びを創造する実践をし続けることである。〈喜びの二元化〉がたとえばファシズムの本質なのだとしたら、それを避けるためにはわれわれ一人一人が絶え間なく〈私（あるいは私たち）に固有の喜び〉をそれに対置していくしかないからである。

スピノザの合理主義——これはおよそ禁欲的な個人主義道徳や、観念論とは正反対の、現実のさなかにおける喜びの政治学そのものにはかならないのである。

注

スピノザの著作からの引用は、Spinoza Opera im Auftrag der Heidelberg Akademie der Wissenschaften, hrsg. von Carl Gebhardt, Heidelberg, Carl Winters, 1925. により、『エチカ』からの出典は繁雑な場合略号で文中に示した。

(1) Martial Gueroult, *Spinoza, Dieu* (Euhique I), Paris, Aubier-Montaigne, 1968, pp.9-10.

(2) ゲルが要約するスピノザの合理主義の根本テーゼは以下の通りである。

① 十全な観念によって、神と人間は個物の本性をそれ自体あるがままに認識する。② 諸々の属性は実体の有そのものを構成し、実体はそれら諸属性の彼岸にあるものではない。③ 我々は諸属性の中で我々に知られている属性をあるがままに認識する。④ 神は、ある創造的な知性ではない。⑤ 神の知性とその一部をなす人間の知性は、神の等しき結果であり、同一の本性から成っている。⑥ 実体は不可分である。⑦ 全体の本性は、完全に部分の中に与えられている。⑧ 原因と結果はある意味で通約可能であり、別個のものではない。⑨ 部分は全体に通約可能である。⑩ 真のすなわち十全な認識は、全体から部分に進む。⑪ それは発生的、直観的演繹である。⑫ 十全な認識の働きは直接、発生的幾何学の中で把握される。⑬ この幾何学はあらゆる真の認識のモデルであり、したがってあらゆる真の形而上学のモデルである。⑭ 代わりに形而上学は、〈幾何学的方法〉による認識が真の観念にのみ基づくことを示す。⑮ それによって、形而上学は哲学に必要な方法を指示し、正当化する。⑯ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ の認識も幾何学的形式の演繹の外には実現しえないので、この演繹からその手続きを取り去って『エチカ』を理解するあらゆる試みは、真理に近づく過程を否定することによって真理に到達しようとするようなものである。(Ibid., pp.12-13.)

- (3) B.Spinoza, *Ethica* II. definitio 3. II. propositio 49 et corollarium.
- (4) Spinoza, *Tractatus de Intellectus Emendatione*. §38.
- (5) Eth. I. prop. 10. scholium. II. prop. 7.
- (6) Eth. II. prop. 40. schol. 2.
- (7) この箇所の邦訳がしばしば「事物の特質について共通概念あることは十全な観念を有することから」と、属格 *rerumque proprietatum* が *notiones communes* をも修飾する形になっているのは文法的にも内容的にも正確とは言えない。この「共通概念が事物の特質に関する十全な観念と同格的に説明されてくるのである」。
- (8) Eth. III. praefatio.
- (9) ゲルシーの立場にはこの嫌いがなるとは言えず、リゴリスティックな合理主義を貫く彼の解釈には、一般的法則の把握を強調するあまり第三種の認識をも第二種の認識に還元してしまおうとする傾向すら読み取れる。 Cf. Gueroult, *Spinoza, L'Âme* (Ethique 2), Paris, Aubier-Montaigne, 1974. Chap. XVI, pp. 446-466.
- (10) この分類には 2P44Dem, 2P44C2Dem のほか、4P62, 4P62Dem, 4P62Sc など時間と持続に関わるもの、十全な認識に関わる 4App5, 4P68Dem などにも関連する。
- (11) Eth. III. prop. 13 以降の物体論に関する *axioma, lemma*.
- (12) Eth. III. lem. 5.
- (13) *Epistulae* 32. における血液におけるリンパと乳糜の比喩。
- (14) Eth. V. prop. 10.
- (15) Eth. II. prop. 37.
- (16) Eth. IV. prop. 39. dem.
- (17) Eth. II. prop. 40. III. prop. 2.
- (18) Eth. I. appendix. IV. pr.
- (19) ラッヌの理性にはむしろ「受動感情からの解放を目指す理性の役割を論じた 4P46, 4P46Dem, 4P47Sc, 4P50, 4P50Dem, 4P50C, 4P51, 4P53, 4P53Dem, 4P54, 4P55 能動感情やその 4P56 の理性を論じた 4P18Sc, 4P51, 4P52, 4P52Dem, 4P53, 4P53Dem, 4P54, 4P58, 4P59, 4P59Dem, 4P63CDem, 4P63Sc, 4P65, 4P65C, 4P66, 4P66Dem, 4P66C, 4P66Sc, 4P67, 4P67Dem, 4P69, 4P69C, 4P70, 4P70Dem, 4P71, 4P72, 4P73Sc, 4App3, 4App25, 5P38. の記述が、上位区分として属する」。
- (20) Eth. IV. prop. 32.
- (21) 例として Antonio Negri は「このようなプロセスから生ずる力を〈集団的主体〉 *Le sujet collectif* と名付け、そこからラディカルな政治的帰結を引きだせることとする」。 Cf. Negri, *L'antimilitarisme sauvage: puissance et pouvoir chez Spinoza*, Paris, P.U.F., 1982. Chap. IX, pp. 336-343.
- (22) この立場をおおむね正反對の立場に立つのが、たとえば Ferdinand Alquié であろう。彼は「スピノザは自らの合理主義を一貫させたならば、能動 (actio) という言葉を身体に適用すべきではなかった、身体の中には真に能動と言えるものも十全な観念に対応するものも存在せず、ひとり精神のみが能動と言えるのだと主張しているが、これなどはスピノザの合理主義

体系の中における身体の役割やコナトゥスの意義を全く無視した解釈のうえをめぐ。 Cf. Ferdinand Alquié, *Le rationalisme de*

Spinoza, Paris, P.U.F., 1981, Chap. XVIII, pp. 298-304.

(23) Eth. II, prop. 40, schol. 2, II, prop. 38.

(24) Eth. II, prop. 40, schol. 1.

(25) Eth. II, prop. 37.

(26) Eth. V, prop. 3, prop. 4, et dem.

(27) Gilles Deleuze, *Spinoza: Philosophie pratique*, Paris, Ed. de Minuit, 1981, Chap. V, pp. 154-158.

(28) Eth. III, prop. 2, schol.

(あやの・としや 筑波大学大学院哲学・思想研究科)